

えて lie も多いが、第8週目にはlieは殆んどみられず、walkが増加する。⑥第1週目は、Cooperationは少ないが次第に増加する。特にレスリングが多くなる。3) 相手を「じっと見る」方が「ちらっと見る」より多い。

1歳 — 1) Stereoが多い。特にauto-graspingが多い。2) Locomotiveは殆んどがsittingで活動量が少ない。3) coo-call が多く生起している。4) Explorationのvisual(周囲をキョロキョロ見る)が多い。5) Cooperationは殆んどみられない。

2歳 — 1) Locomotive中 walk, runが多く活動量が多い。2) 物に対する関わり(特に、oral)が多い。3) 「ちらっと見る」が多く、「じっと見る」等の視線固定が少ない。

4) Contact, Cooperationが0歳、1歳より頻繁にみられる。

尚、プレイルーム内の移動距離については、0歳では観察当初小さく第3週目にかけて次第に増加し、2歳では当初より大きく、1歳では終始小さかった。

血中性ホルモン的人為制御によるニホンザルの ゴナドトロピン分泌動態の解析

井上昌次郎

(東京医歯大・医用器材研)

本研究の目的は3つある。

1. 脳下垂体によるゴナドトロピン分泌と生殖腺による性ホルモン分泌とは、閉回路による相互依存性があるため、経時的な解析が難しい。そこで生殖腺除去により性ホルモンの脳-脳下垂系へのフィードバックを断ち、代りに注入ポンプで既知量の性ホルモン(エストラジオール)を連続的に血中に供給する。こうして性ホルモン入力に対するゴナドトロピン出力のダイナミクスを解析する。
2. 生殖腺がただちに注入ポンプに置換されたときと性ホルモンが長期間血中に欠如する状態にあったときとは、性ホルモン入力に対する脳-脳下垂体系の応答は異なるはずである。そこで、生殖腺除去の直後、5週後および12週後の8回にわたって注入を試み、血中ゴナドトロピン量を比較する。
3. ニホンザルには明瞭な繁殖季節がある。この

リズムが中枢性の調節下にあることが明らかにされているから、注入実験の時期によって結果が異なるであろう。エストラジオール注入に対するLHサージ誘発を指標として比較したい。不妊期の8月、交尾期開始の9月、それに繁殖期たけなわの11月に分けて注入実験を試みる。

5歳の雄が3頭提供されたので、精巣除去を1979年8月6~7日に行い、1分当たり69ピコグラムのエストラジオールを13日まで注入したのが、第1回の実験である。第2、3回はそれぞれ9月10~15日と10月31日~11月6日に行った。1日4回6時間間隔で、静脈血を採取し、血清を凍結保存してある。ラジオイミュノアッセイによるゴナドトロピン定量は現時点では終了してないので、結果については報告するに到っていない。

設定課題 4.

霊長類の系統・種分化・種の特性 に関する研究

サル組織適合性抗原の研究

—系統発生的ならびにDR抗原の検討—

天野 栄子(東京医大)

前年度までの研究によりヒト組織適合性抗原(HLA)とサル組織適合性抗原(MLA)との間に一部共通抗原のあることを明らかにしたので、本年度はMLAの分類をさらに解析し、MLAの遺伝的背景及び両者の系統発生的な関係を lysostrip法を用いて検索した。またサルのB細胞抗原、特にDR抗原とヒトのそれとの関係についても検討した。

サルリンパ球31, サル同種免疫血清38, 異種免疫血清28, 抗HLA-A, B血清90, 抗HLA-DR血清60を用い、cytotoxicity test はNIH法に従った。lysostrip法はMaya Ranらの方法によった。サルリンパ球は、E-rosette形成細胞(T細胞)と蛍光抗体法による免疫グロブリン保有細胞(B細胞)に分類した。

今回までに作製したサル同種免疫血清を推計学的に解析したところ、 α 系4種の抗原の存在が示唆された。これを確認する目的でさらに免疫を行い、標準抗 α 1血清との相関係数 r 0.7及び0.5